32―5　小野路城跡（町田市小野路町字城山・奈良ばい他）　地図11

別　　名　結道城

沿革・伝承　『風土記稿』多磨郡之八・柚木領小野路村・上図師村の条共に、城に関する記載は見られない。ただ小野路村については、相州矢倉沢から上州へ通ずる往還（鎌倉街道）が通っていたため、正保頃までは小野路宿と称していたことを伝えている。当地は、戦国期には交通の要衝であったとみてよいだろう。

小野路城について直接言及した史料はないが、『太田道灌状』には、文明９年（1477）の３月頃、長尾景春の乱に際して扇谷上杉方が「小山田」に拠点を構えていたことが記されている。「小山田」は小山田城を指すものと考えられることが多いが、小野路城を指している可能性もある。この時期、景春の蜂起によって扇谷上杉軍の主力は北武蔵から上野方面で苦戦を強いられており、太田道灌は江戸城を中心として相模・南武蔵方面の景春方鎮圧に奔走していたから、「小山田」の拠点は江戸城と相模方面の扇谷上杉軍との連携を確保するために築かれた城砦と推測できる。しかし、相模方面への後詰に南下してきた景春方の軍勢により、「小山田」の拠点は「相散」らされてしまった。

ちなみに永禄２年（1559）成立の『所領役帳』では、「小野地」は「小山田之内四ヶ村」と共に他国衆の「油井領」の中に見え、大石氏領であったことがわかる。

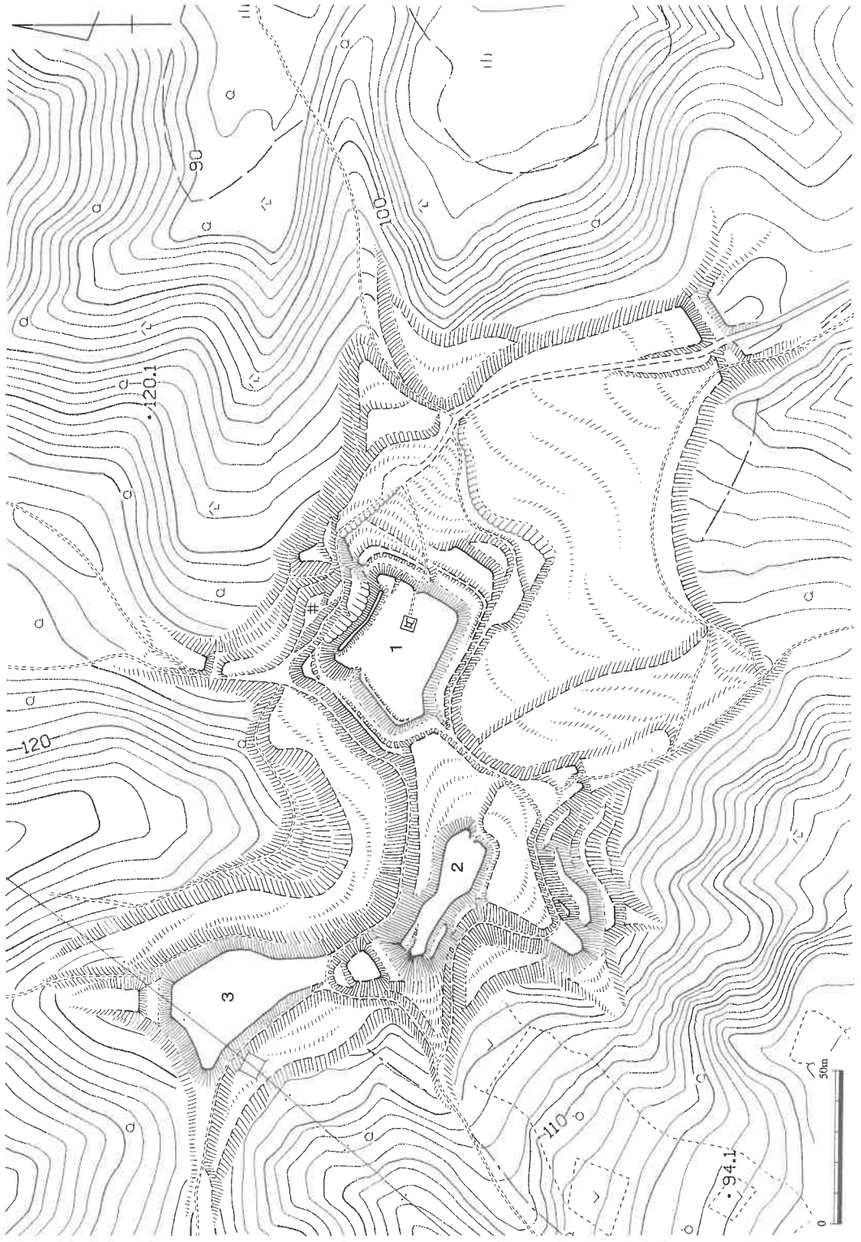
遺構・考察　多摩ニュータウンをはじめとする開発が進む多摩地区の丘陵地帯にあって、小野路城の周囲は雑木林と農地が展開する景観を保っており、城郭の遺構も比較的良好に遺存している。城の東側、万松寺谷と呼ばれる谷戸は中世以来の寺院として著名であり、西方1.5kmには小山田城がある。城地周辺の丘陵上には尾根道が四通八達しているものの、小河川によって開析された支谷と尾根が複雑に交錯する丘陵地特有の自然景観が卓越する地域である。

この城の特徴として第一に、堀・土塁・壁によって明確に形成された曲輪の周囲に、加工度の低い自然地形に近い外郭が広がっていることである。第二には、周辺の丘陵に接続する尾根や谷戸に下る支尾根について、それぞれ異なった対応をしていることである。

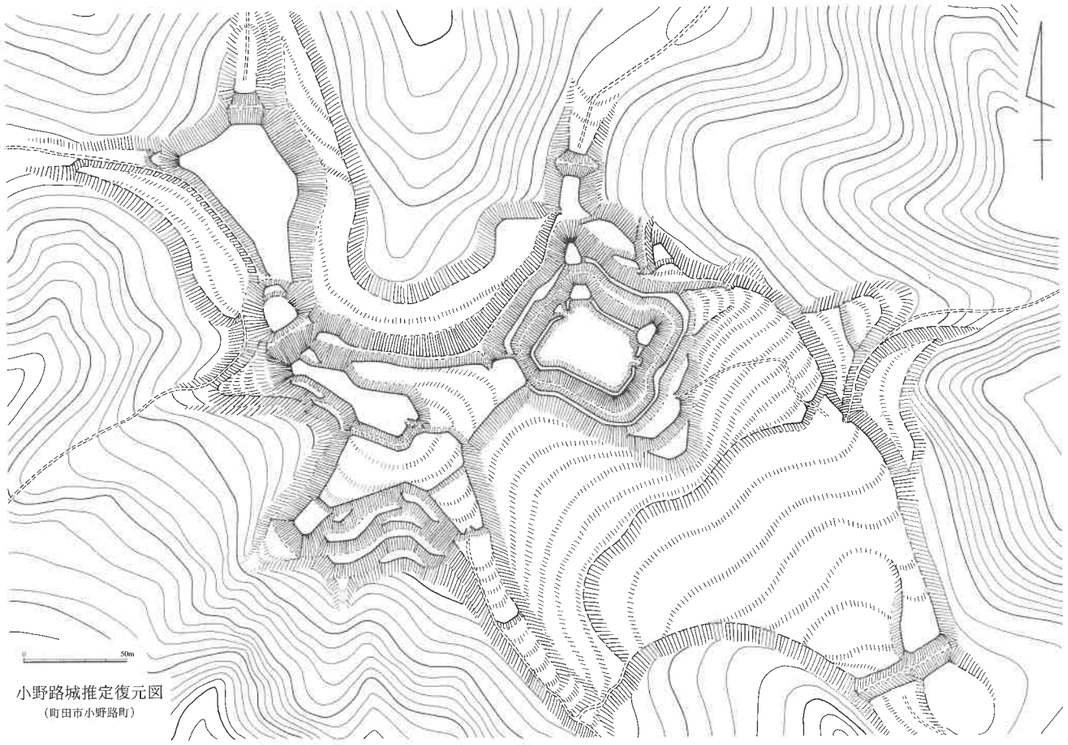
主郭１は横堀に囲まれており、土塁も２面以上に存在したようである。しかし、西隣の曲輪２は上段部分のみ明確な壁で画されているが、下段部分は加工度が低い。曲輪２の北西には、堀切と小平坦地を隔てて曲輪３があり、３の北に続く尾根は明確な堀切で遮断されているけれども、西側尾根の処理は壁のみである。曲輪２から西・南西・南に下る支脈の尾根についても、それぞれ異なった処理を施しているが、いずれも堀切は入れていない。主郭の北に続く尾根については鞍部に堀切を入れているが、万松寺に下る東側の支脈の尾根には明確な遮断線は形成していない。また、主郭の南側には広大な自然地形の緩斜面が広がっているが、南東に続く尾根の鞍部は堀切で明確に遮断している。なお、主郭の北東下には「小町井戸」と呼ばれる井戸があって、小野小町の伝説を伝えている。小野小町云々は附会であろうが、井戸自体は小野路城の水の手として重要である。

縄張の技法について見ると、全体に地形に逆らわないプランニングで横矢掛りの屈曲等はない。主郭や曲輪２には虎口のように見える部分もあるが、現状ではそれと断定できず、少なくとも枡形や馬出のような技巧的な虎口は認めることができない。全般には技巧に乏しく、比較的古相を留める縄張と評価してもよいであろう。また、尾根によりそれぞれ対応を変えている点から見て、築城者は敵の攻撃が予想される方向と、連絡線を確保する方向を明確に意識して使い分けていたものと考えてよい。

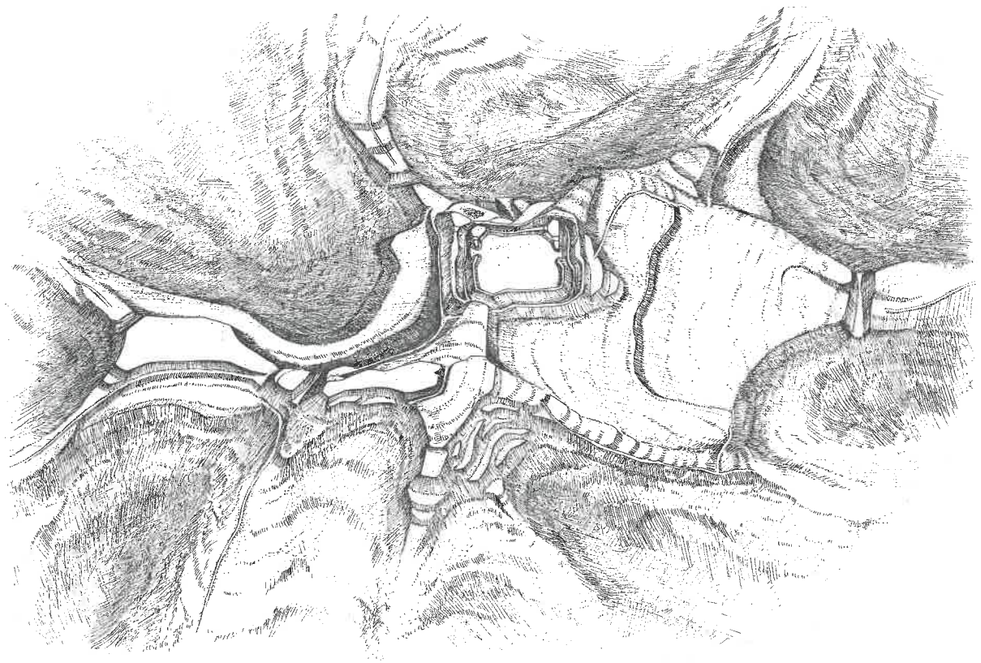
小野路村が中世には鎌倉街道の宿であったと考えられること、および小野路城が尾根道の結節点を扼していること等を考え合わせると、景春の乱に際して扇谷上杉氏が取り立てた「小山田」の要害としては、小野路城が該当する可能性は否定できないものといえる。



第73図　小野路城跡縄張図（S＝1/2000）



第74図　小野路城推定復元図（S＝1/3000）



第75図　小野路城推定復元俯瞰図

32－6　小野路関屋城（町田市小野路町）

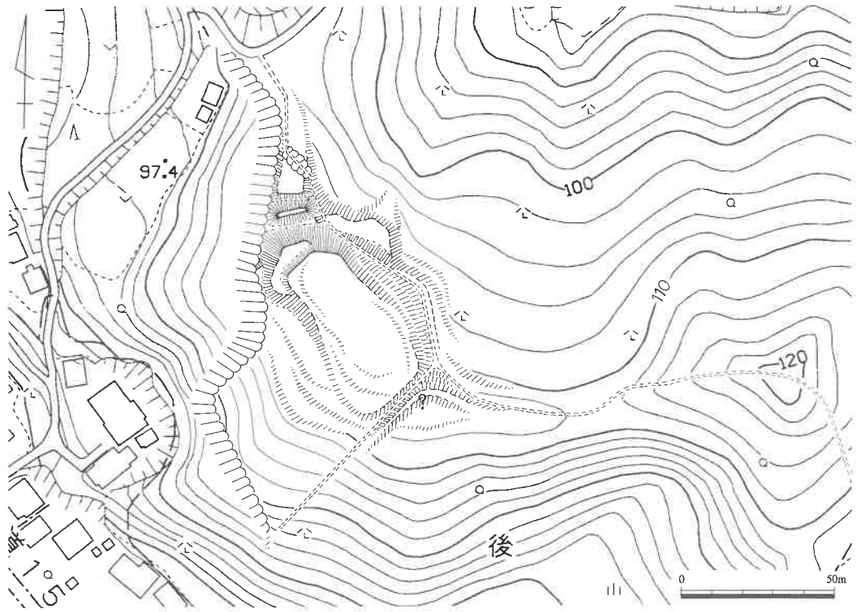
地図11

沿革・伝承　多摩歴史街道研究会が近年発見した城郭遺構で、記録・伝承ともなく、築城主体・時代等は一切不明である。

遺構・考察　小野路宿背後の丘陵上にあり、小野路城の東方１kmに位置する。城地は標高106m、小野路宿からの比高は約30mを測り、現状は山林である。

稜線を遮断する小規模な二重堀切と、それに面した削り落としの壁面が遺構のすべてで、明瞭な曲輪は存在しない。二重堀切の南東60mほどのところにも、浅い切通し状の地形が観察できるが、堀ではなく道の跡であろう。周囲の広い範囲にわたって曲輪や塁壕が展開しているかのように描かれた縄張図が一部で発表されているけれども、今回踏査した限りでは下図に示した以上の明確な築城遺構は確認できなかった。

小野路関屋城は、尾根道の遮断を目的として、ごく少人数の部隊によって築かれた臨時性の強い阻塞であろう。城郭遺構としては極小規模の事例であるが、通路遮断のための阻塞として貴重な遺構である。長尾景春の乱に際して扇谷上杉軍が使用した「小山田」の拠点が、仮に小野路城を指すのであれば、関屋城はこれを攻略した景春方軍勢によって築かれた城砦として考慮する必要も生ずることとなる。なお、小野路地区の丘陵上には他にも何ヶ所か、堀や塁壁・段築状の人工地形が観察されるが、それらが阻塞遺構であるのか否かについては、現段階では判断が難しい。



第76図　小野路関屋城縄張図（S＝1/2000）